ジョニー・ゴット・ヒズ・ソード

Johnny Got His Sword.

ダークサイド・オブ・マイ・マインド　X1

The Darkside of my Mind. -X1-

草案　未完

コロセウム。大きな石と赤茶の煉瓦で作られた巨大建造物。小高い丘から見下ろすと、楕円形をしているのが判る。外から見ると高さは二階分ぐらいしかないが、中から見ると地下がくりぬきになっていて、底面からは五階分の高さになっている。

底も楕円形をしているのだが、その広さはかなり広い。長径は手を広げた大人が五十人がいても届かないだろう。短径は四十人でやっと届く程だ。

その楕円の底には土が敷き詰められている。一部は背の高さほどのこぶ状のでこぼこになっていて、一部は腰高ほどの塹壕になっているが、ほとんどの部分は平らだ。

観客席は八割ほど埋まっている。観客の七割が人間種で、残りが亜人種らしい。

さほど広くない部屋に、安っぽいソファーと木のベンチが置かれている。冒険者風の男女と狼人が一匹。オーガが一匹、騎士風の女が一人。ソファーに深く腰かけた冒険者風の女は左目に眼帯をしている。女騎士と狼人は直立し、オーガは床に座っている。冒険者風の男は木のベンチに座り、大きめのバッグを覗き込んでいる。

冒険者女。黒革のライダースジャケットを着て、黒革とおぼしきショートパンツをはいている。足の横にはこげ茶のロングブーツが置かれている。ブーツはニーハイなのだろう、かなりの長さがあり片方は途中で折れ曲がっている。もう片方は編み紐が大きくほどけている。そして、その中に無造作に黒いワンドが差し込まれていた。

革は使い込まれていた。使用感は外目からの判るくらいだが、手入れはきちんとされていて、程よくてかっている。女の座るソファーの背には灰色の布マントが、これまた無造作に置かれていた。フード付きだがシンプルなデザインのマントは革の防具に比べると新しい品のようだ。

【革は新品だと硬い】

冒険者の男は、のぞき込んでいたカバンから、かぎ爪の義手を取り出しテーブルに置く。しばらくそれを眺めたのち、そのかぎ爪を横にずらし、手のひらに相当する部分が繰小刀になった義手をカバンから出し隣に並べる。

男はじっくりと、かぎ爪と繰小刀を見比べ、かぎ爪をカバンに戻す。そして、繰小刀の義手を左手に装着する。

冒険者風の女は落ち着かない様子で右手の中指で自分の膝をトントントンと叩いている。ずっとその動きが続けられていたが、突如指が止まり、ブー

ツを履き始める。
ブーツを履いている女を除いた、部屋にいるすべての者が同じ壁を見る。一瞬ののち、その壁の方向から大歓声が漏れ聞こえてきた。
ドンドンドンドンと扉を四回ノックする音が聞こえる。【どんな扉?】女騎士のいらえで扉があき、メイド服の女が顔を出す。
「前の試合が終わりました。フィールドの準備が整い次第出番となります。間もなく魔術士が参りますので、ご準備をお願いします」
「あ、お水ちょうだい」
伝えることだけを伝えると出ていこうとする、なかりトウの立ったメイドに向かって冒険者風の女が声をかける。女騎士はやれやれといった様子で、片目の女をたしなめる。
「試合前にがぶ飲みすると辛くなりますよ」
「だってのどが渇いちゃうんだらしょうがないじゃない」
女騎士はその答えに肩をすくめる。ニーハイブーツを履き終わった女が、空になっていたガラスの水差しをメイドに渡す。メイドは無表情でそれを受け取ると部屋を出ていく。
扉が閉まる直前、あきれたように人を見下す表情となるが、それは一瞬のことだった。
扉が閉まり、メイドの姿が視界から消えると、冒険者風の女がニヤリと笑った。
「さてと、第二回戦もギリギリっぽく勝つよ」
そう云い放つと立ち上がってマントを羽織った。

円卓会議室【会議室の様子、風景、参加者(真嶋まなかがいない)】朝食会。
白石支津香がパン食をサーブする。美月の前に配膳された朝食は一般的なパン食だが、ほかのメンバーはみな、量が少ない。
「では始めますっ」
ジェスターの発声でいつもの報告会が始まる。

だが、近くで見ると、それはただの塀にしか見えない。

美月「レギュレーションはアイテムあり、魔法ありの個人戦と全く同じにしてもらうよ」
ストング「当然だな」
美月「レフリーもいいね」

ベリ、うなづく。
ストング「よし、鐘をならせ」
美月「待って、その前にいつもの確認をさせて」
美月、ベリを見る。ベリはあきれ顔でうなづく。
美月「死合中に怪我させたり殺したりしても、私は何の責も負わないよ」
ベリ「多少の怪我はあるかもしれないが、死ぬことはない」
美月が口を開けようとするが、ベリが続ける。
ベリ「万が一、相手が死亡することがあっても、試合中の出来事であれば、対戦者は一切の責を負わない」
美月「ありがとう。言質とったからね。これで心置きなくぶっ殺せるよ」
美月はニヤリと笑う。
ストング「もういいか」
美月「待ってよ。あんたは強そうだから、得物を変更するよ。ゲルヒルデ、島津紋出して」
美月が後ろに控える女騎士に声をかけると、ゲルヒルデはずた袋から十字刃のついたナックルを取り出す。そして、美月に促されそのナックルをベリに差し出す。
美月「レフリー、それとあんた、それ、今までに確認受けてない武器だから確認して」
ストング「確認なんかいらねえ、さっさとそれを付けろ」
ベリは肩をすくめてナックルをゲルヒルデに返す。
美月「私はあんたのを確認したい。あんたは汚い手を使いそうだからね」
ストング「死合のときはそんなことはしねえ」
美月「どうだか」
ストングは大太刀を持って無感情に立っているフレイヤを呼びつける。フレイヤは重そうに大太刀をストングに渡す。ストングは片手で受け取り、美月に向かって突き出す。美月も片手で受け取ろうとして、よろける。
ストング「おいおい、落とすなよ」
美月、ストングをギラリとにらむ。太刀を両手でしっかりと掴み、鞘から抜き取る。舐めるようにじっくりと検分する美月。考えるような眼差しをし、太刀を鞘に戻しストングに返す。ストングが受け取ると、素早く左手人差し指で左のこめかみをダブルクリックする。
美月「神剣レベルかな」
ストング「ビビったか。この太刀でたっぷりお前をいたぶってやる」
美月「防具も見せてもらうよ」
美月はストングの挑発を無視して、胴、甲、脛当、ブーツを見ていく。特に脛当とブーツは膝をつき、脛やつま先に触りながら丹念に見ている。
ストングはそんな美月を見下ろして笑う。
ストング「そのまましゃぶってくれ」
美月「あんたが死合の後で生きていたらね」
そう言ってニヤリと笑いながら立ち上がる。
ストング「その言葉、忘れるな」

美月、ニヤリ笑いを崩さない。
ストング「鐘をならせ」
美月「待ってって」
ストング「遅い女だな。まだ何かあるのか」
美月「私はナックル付けなきゃいけないからね」
ストング「早くしろ」
美月「ゲルヒルデ、手伝って」
美月、ゲルヒルデと共にスタートサークルの遠い側に向かって歩いていく。円の最奥までくると、島津紋をボクシンググローブよろしく、左右の手に付けてもらう。
ゲルヒルデ「神剣でしたか」
美月「五位の大太刀。でも粗悪品だね。もとはよかったのかもしれないけど、風化しちゃってボロボロ」
ゲルヒルデ「であれば問題ありませんね」
美月「大丈夫だと思うけど、万が一の時は乱入して」
ゲルヒルデ「かしこまりました。ポセイドーとイェマラジャにも伝えます」
ゲルヒルデはナックルの装着具合を確認すると、競技場から出ていく。美月はそれを確認するとカシャカシャと拳を合わせ、右手を上げる。
美月「いいよ」
ストング「よし、鐘をならせ」
ベリが持っていた鐘を一回ならす。
ベリ「両者、開始円の中へ」
その言葉と共にフレイヤが慌てたように競技場から出ていく。ストングはゆっくりとスタートサークルの最前部に位置する。
ベリ「鐘を三回鳴らす。鐘三つと同時に試合を開始する。呪文は一つ目の鐘から唱え始めていい。ただし発動は三回目の鐘がなってからとする。アイテム使用は鐘三つの後でなければならない。では始める」
鐘が一つなる。
美月「我願うは数多の火力」
二つ目の鐘。
「火と炎。火炎をつかさどるイフ」
三つ目の鐘。
美月「バースト。フルスピード」
鐘三つと共にストングが前に飛び出す。いや、飛び出そうとした。飛び出そうとしたのだが、何かに躓くような衝撃を感じ、バランスを失って顔から地面に突っ込んでいた。
「フルパワー」
倒れたストングの頭の後ろで小さく美月の声が聞こえる。手をついて立ち上がろうとしたストングは押し倒されたよな衝撃を背中に感じ、再び顔を地面に突っ込ませた。
「自分で起き上がることもできないの。無様だね」
土をなめているストングの背後から、美月の嘲り笑うような声が響いてき

た。

三つ目の鐘と共に、美月はダミーの詠唱をやめ、脛当を調べるふりをして、つま先に仕込んだごく少量のプラスティック爆弾を爆発させた。そして、それと共に自らに俊敏性アップの魔法を施したのだ。

美月の素の能力でもストングの所まで一秒もあれば到達できる。そこにスピードアップの魔法がプラスされれば、文字通り目にもとまらぬ速さで接近することができた。

その速度で動く美月にとって、ストングの動きは止まっているに等しい。美月のランクでは全力のフルスピードの有効時間は一秒に満たないのだが、それだけの時間があれば、ダッシュでストングの元にやってきて、バランスを崩したストングを地面に押し倒すのはたやすいことだった。

フルスピードのとけた美月は腕力アップの魔法に切り替える。そしてストングの背後から左右の肘と左右の膝を島津紋で撃ち抜いた。

島津紋、正式名クロスブレイドナックルはただのブレイドナックルではない。拳の先は筒状になっていてその先に十字刃がついている。普通と違うのはその円筒状の部分だ。その中には薬莢がセットされていて、その爆発で十字のブレイドが押し出される構造となっている。薬莢は四つ充填でき、左右で八回ピストンさせることができたのだ。

腕力アップした美月の力と火薬の爆発が相まって、十字ブレイドはストングの両肘と両膝を裏から切断していた。そして、切断を確認した美月はスッと立ち上がり、なすすべなく地に伏せているストングをあざ笑ったのだ。

「何故ここにいる。きさま、空間魔法使いかっ」

体をねじることで上半身を起こしたストングが美月を睨みつけた。ストングや周りで見ている観衆には一瞬のうちに移動した美月は、時空魔法か空間魔法を使ったように見えたかもしれない。

「あんたがその答えを知ることは永久にないよ」

美月が腰だめで右手を引く。それを見たストングが大太刀で防御しようとして、そのときはじめて肘から先がないことに気がついた。

「バイバイ」

突き出した美月の右手はストングの顔にぶつかる。その瞬間、トリガーにかかっていた美月の人差し指に力が入り、ポスッという大きな音がして、島津紋が勢いよく伸びる。それによってストングの頭の左半分が消えてなくなった。

闘技場は静まりかえっている。その中で美月はニヤリと笑いながら、ストングの体からブレストアーマーをはぎ取っている。静けさの中でアーマーと島津紋がぶつかるたびにあがるカチャカチャという音だけが響いていた。

「な、なにをしているのか」

ストングの体を蹴飛ばした美月に鳥人のベリが降りてきて、おそるおそる声をかける。

「何って、こいつが死んだら全財産もらうことになってたじゃないですか。だから、私がもらっていいですよね」
「死んだのか」
「死ななくても、私は勝ったら、装備と女は私のものですよね。って、そうか。まだ終了ゴング鳴ってなかったですね。ごめんなさい」
美月は担いでいたブレストアーマーを投げ捨てる。
「美月爆裂百拳」
美月が天に向かってナックルスキル名に自分の名前をかぶせて叫ぶ。
「アタタタタタタタタッ」
気合いの叫び声と共に、ストングをまたいだ美月の拳が雨あられと裸になった上半身、軽装のズボンを穿いた下半身、半分だけになった頭を打ちつけていく。
あまりにも速い美月の腕の動きに見ている者には美月の腕が十本にも二十本にも見えただろう。
「アチョーッ」
奇声と共に美月の右手が地面を打ち抜く。その衝撃がドンッという音をたて、スタジアムを揺らした。
ストングはすでにその姿を失い、ただのミンチ肉と化していた。美月はミンチ肉の塊から少し離れて腕をつき伸ばす。
「燃えな」
呪文とは思えないような呪文を唱えると、ストングの肉体だったものは赤々とした炎に包まれていった。
美月は燃えるストングを無視し、炎の周囲に散らばった四肢から篭手と脛当を外していく。外し終わり、残った腕や足は燃える炎の中に放り投げられていった。
そして、最後に残った大太刀を見た美月はつかつかと近づき、横たわる大太刀の柄の近くと中ほどを島津紋で叩きつけた。すると、パキンッという甲高い音がして、大太刀は三つに切断されていた。
篭手と脛当、折れた太刀が一山にまとめられるころ、肉を焼く炎はスッと消えていった。
「ねえ、これでもまだ終了のゴングはならないの」
呆然とし続けているベリに対し、美月が乱暴に尋ねた。その問いにハッと我に返ったベリが手に持つ鐘を連打する。
「し、勝者。ミヅキ」
レフリーのベリが叫ぶがスタジアムは静まり返ったままだ。いつもなら終了ゴングと共に熱狂の渦に包まれるのだが、あまりにも異様な、そしてありえない光景に人々は声を上げることができなかったのだ。
「終わったよ。ゲルヒルデ、それにそこの美人さん、来て手伝って」
美月が控えの席の二人を呼びつける。ゲルヒルデはすぐに反応するが、フレイヤは動こうとしない。
「ゲルヒルデ、美人さんも連れてきてよ」
すでに歩き始めていたゲルヒルデは後ろを振り返ると顔をしかめて控え席

の戻った。そして、フレイヤの襟口をつかみ、引きずるように再び歩き出した。
「レフリー、いつまでもあのままにしとくんじゃなくて、早く生き返らせてあげなよ」
美月はあごで、ストングをしめす。
「あれを。あれを生き返らせることができるのか」
「だって闘技場じゃあ人は死なないんでしょ。怪我してもちゃんと治るんでしょ。そう言ったよね、みんな。私が何度確かめても『ハハ、死ぬことなんてありえない』って私のこと莫迦にしたよね。早く生き返らせてみせてよ。できるんでしょ」
「生き返るのか」
独り言のようにつぶやきながら、ベリは本部席を見た。
「救護班、オズ老子を呼んでくれ」
その救護要請がスタジアムに響くと、観客席が騒然とし始めた。
ドスッ。騒がしさが届き始めた美月の耳に大きなものが投げられた音が聞こえた。その音で下を見ると、フレイヤが足元でうずくまっていた。
「連れてまいりました」
ゲルヒルデは無表情でそう言いながら、美月にタオルを差し出した。
「まずは返り血をお拭きになってください」
美月はタオルで頬をぬぐい、次に左の島津紋をざっと拭いて、そのままゲルヒルデに向って突き出した。ゲルヒルデは何も言わず美月の島津紋を外していった。
「そこの美人さん。あなたも手伝ってよ、ナックル外すの」
そう言われてもフレイヤは呆けた顔をしているだけだ。
「美人さん、あなたの名前は」
そこではじめてフレイヤは声をかけられているのは自分であることを悟り、美月を見上げた。
「フレイヤです」
「フレイヤ。あなたは今から私のものだから。あなたの所有権はそこの塊から、私に移ったから、そのつもりで」
「塊ですか」
「ストングって呼ばれてた男だったもの。今は肉団子だけどね」
「肉団子」
左手で示された方向を見たフレイヤの顔がゆがんでいく。
「ストング様」
「そ、おいしそうでしょ。肉団子」
「肉団子？　おいしそう？」
「食べてみなよ。表面は黒焦げになっちゃてるけど、ズボンの中の太腿とか、表面をのければおいしいハンバーグになってると思うよ」
「え、ストング様を食べるのですか」
美月はニヤリと笑う。

「ハンバーグは嫌い？」
「む、無理です」
その答えを聞いた美月の目が急に吊り上がり、島津紋が外され自由になった左手でフレイヤの腕をつかんだ。そして、引きずりながらストングのもとに連れていった。
肉の焼ける匂いが立ち込めている中、美月は右手に持っていたタオルを左手に持ち替えた。右手はまだ島津紋が残っている。その島津紋の刃を使って、焼け焦げたズボンと、それにこびりついた肉を脇にそぎ落としていく。表面がぬぐわれると、軽く火の通ったミディアムレアの赤茶色のミンチ肉があらわれた。
「うん。やっぱり中はちょうどいいくらいに焼きあがってるね。さ、召し上がれ」
美月はフレイヤに向かってニヤリと笑う。フレイヤは目を見開いて美月を見つめた。
「本当にこれを食べるのですか」
「美人さん、あなた『おいしそう』って言ったじゃない。早く食べなよ。今ならアツアツだよ。冷めるとおいしくなくなっちゃうよ」
そう言いながら美月は右の島津紋をゲルヒルデの前に突き出す。ゲルヒルデは美月からタオルも受け取り、ざっと島津紋を拭いて手際よく外していく。
「これを、た、た、食べるのですか」
フレイヤは美月を見て震えだした。
「そうだよ。そう言ってんだよ、私は。グダグダしてないで早く食え」
「む、無理です」
「全部食えとは言わないよ。食えるだけ食えばいいんだよ。今までだってこいつの肉棒、何度もしゃぶってんだろ。口に入れるだけで済ますか、喉の奥まで入れるか、たったそれだけの違いじゃない。食えない訳ないだろ」
その言葉と同時に島津紋が美月の腕から外れた。両手が自由になった美月は左手でフレイヤの後頭部をわしづかみにし、肉の中に押し付けた。
「きゃあ、熱い、熱いです」
頬の左を目の所までミンチ肉の中に埋もれさせたフレイヤが悲鳴を上げるが、美月は一向に気にしない。
「うるせえな。わめいてないで食え」
美月はさらに左手に力を入れて頭を押さえつけ、右手でフレイヤの口の中にねじ込むようにミンチ肉を押し付けていった。フレイヤは悲鳴を上げ、むせびこむが、美月は次から次へと口の中に肉を入れ続けている。
「きゃああ、ぐぼっ」
フレイヤがそれから逃れようと大声を出して暴れる。
「黙れ」
美月は頭をつかみ上げ、吊るすようにフレイヤを立たせると、右手で大きく平手打ちした。
パチャッ。その衝撃で、ぐちょぐちょのミンチ肉がフレイヤの頬からはじけ

飛んだ。
「わめいてないで、食えよ。言うことを聞かないと、てめえも肉団子にするぞ」
フレイヤははたかれた頬を押さえながら、恐怖の目で美月を見ている。
「食え」
美月はそう命じると、フレイヤをミンチ肉の中に叩きつけた。フレイヤは上目遣いに美月を見ながら、素手で肉をすくい、ノロノロと口の中に入れた。
そして、悲鳴を上げながら、咀嚼しはじめた。
「せっかくのおいしい肉団子なんだからさあ、もっとおいしそうに笑いながら食べなよ」
美月が顔を近づけ、ニヤリと笑うと、フレイヤは震えだし、白目をむいた。
「あはは。うふふ」
フレイヤは焦点のあっていない目でミンチ肉を食べている。垂らしているよだれをぬぐうこともせず、満面の笑みを浮かべ、一心不乱に食べる姿は、いかにも幸せそうだ。
「ふふふふ」
笑いながら肉をほおばる様子を美月は満足げに見ていた。
「怪我人はそこの大女かの。これはひどいの全身血まみれではないか。コロセウムの中でそれほどの怪我をするとは、どれだけ防御力の低い闘士なのだ」
ローブを羽織ったいかにも魔法使いという感じの老人がゆっくりと美月に近づいてくる。
「どれどれ、診せてごらんなさい」
「救護に来てくれた方ですか」
「ふむ」
見下ろすように魔法使いを見た美月の誰何に、老人は簡単に答える。
「オズ老子、ご足労様です」
ベリが話し始めた二人の間に丁寧な話し方で割って入った。その対応からしても、老人の風貌からしても敬われるべき者としての地位を持っているのだろう。
「怪我人は私ではなく、あそこにいますよ」
ベリの対応を見た美月が、多少丁寧な言葉づかいに変え、ストングだったものを指し示した。オズはそちらを見て、顔をしかめた。
「あの気がふれた女人を治すのかの。精神系のダメージであれば、儂より適任の者が別におるであろうよ、ベリ」
「いえ、治していただきたいのはあの女ではございません。オズ老子」
「そうです。治すのは、あの気違い女じゃなくて、女が食べてる肉団子ですよ」
「肉団子とな」
オズはさらに顔をしかめて、フレイヤの口元と手の動きを見ていった。
「なんの冗談だ。あれを治せとは。いくら儂でも死人を生き返らせることは

できぬぞ」
「そうですよね。私も無理って思うんですが、みんな言うんですよ。老子様ならあんなのでも生き返らせることができるって。ね、レフリー。あなたそう言ったよね」
美月とオズに見つめられたベリは二人の視線から目をそらした。
「ベリよ。儂を愚弄するのか。儂であってもできぬことはできぬぞ」
「愚弄などとんでもない。私はただコロセウムでは人は死なないと言っただけです。オズ老子は死者を生き返らせることができると言った訳ではありません」
「コロセウムだとて、人は死ぬに決まっておろう」
「そうなのですか」
「そうですよね」
ベリと美月の声が重なる。
「ですが、ここでは闘士は魔法で護られるのではないですか。その護りがあるので死ぬことはないと聞いています」
「これだから若いのは困る。護られるとも。だがの、それは程度のある魔法だ。それを越えた力が与えられれば、そんなものは役に立たんわ」
「そうですよね、私の見立てでもそう見えましたよ。スタジアム内の魔法は、その人が持っている防御力を五倍ぐらいしか増加させないって」
「一枚と素肌分と三枚だ。装備と同じ防御力が外側に展開されるのじゃ。そして、その内側に皮膚の表面から致命傷になるまでの防御力がはいって、さらにその内側に装備の三倍の防御力が敷かれるのじゃよ。勝敗判定は、致命傷の位置を越えてダメージが与えられたときに光るのじゃ」
「なるほど、そんな風になってたんですね。そこまで詳しくは判んなかったです」
「大女、あれをつぶしたのは、お主かの」
「はい」
「お主もやりすぎじゃ。魔法の仕組みが判っているのなら自重せい」
オズの咎めるような口調に、美月は恥じるそぶりで頭を掻いた。
「いやあ、あいつだっていけないんだよ。膝の裏と肘の裏の防御力が弱いよって、わざわざ指摘してあげたのに無視するんだもん。それにね、腹に据えかねる相手だったから、全力だしちゃったんだよ」
「ふん。これだから若いのは困るのだ」
オズはやれやれといった感じで首を振った後、ベリに向き直った。
「用はこれだけか。なら、儂にできることはない。下がらせてもらうぞ」
ベリは言葉が出ずに、ただオズを見ている。オズはベリが何も言わないのを同意と受け止め、踵を返して立ち去ろうとしたのだが、それを美月が呼び止めた。
「老子様、では、あのストングは死んで、もう生き返らないってことでいいですか」
「あたりまえだ。儂はネクロマンサーではない。死人を動かすことなどできん」

その答えを聞いた美月はニヤリと笑い、深々と頭をさげた。その動きに満足したのか、オズはのそのそと競技場を後にした。

「レフリー、聞いてたでしょ。死んだってさ、あの男。生き返んないって。これであいつの財産はすべて私のもんだからね。問題が起こったときは、そう証言してもらうよ」

ベリは顔をしかめるが、何も言わず、ただうなずいた。美月は再びニヤリと笑い、スタジアムを見回した。そして、一度、大きく息を吐いた。

「我が名は美月。闇面の美月。拳の技をイェマラジャに習い、魔法の教えをブリュンヒルデから受ける者。女神に愛でられし者。我に敵なし、我ら闇面に敵なし。聞け、そして覚えよ。子々孫々に伝えよ。我にあだなす者、我らに挑む者には死を与える。我が名は美月。我らは闇面。この名前、ゆめゆめ忘れることなかれ」

なじみとなった台詞が、低く地をうねるような声で発せられる。いつもならここで、笑い声や冷やかしのヤジが飛ぶのだが、今回は観客席からは一切の物音は起きなかった。そのなかで、狂った女の笑い声と、肉をはむクチャクチャという音だけが響いていた。

「これで二年間、私たちは攻撃されないよ。よかったね」

「結果的にはそうなりましたがっ、やりすぎですっ」

得意がる美月に強い口調でジェスターが窘める。

「あの後っ、私がどれだけ苦労したと思っているのですかっ」

個人戦の公式記録は、不戦勝により、オーガのハルバルズの優勝となった。ストングは体調不良から決勝戦を欠場したとされたのだ。そしてその直後、ならず者相手に刃傷沙汰を起こし、そのときの傷がもとで死亡したと発表された。刃傷沙汰も、やけを起こしたストング側から吹っ掛けたものであり、ちょうど期限の切れる二年目の決勝戦の後の出来事であるため、ならず者の行動も不問にされたとの補足説明までされた。

闇面と美月の悪目立ちを抑えるため、ジェスターが動き、そう発表するよう運営に圧力をかけたのだ。

コロセウム内での死亡事故を隠したい運営とも、利害が一致し、その結果として、突っ込みどころ満載の作り話が発表されたのだ。

当然、コロセウムにいた者はそれが真実でないことを知っている。だが、ほとんどの者は見た者の衝撃から多くを語ろうとしなかった。語るものがいなければ、公式発表がすべてとなる。こうして、この年の闘技会は閉じられたのだった。

翌年。闘技会の開催は危ぶまれた。参加者も前年より少ない。グループ戦参加者は二十組。個人戦は三十二人だった。個人戦は普段なら抽選になるほど応募があるのだが、抽選はなくぴったりの三十二人。例年より主催国の軍所属の騎士と魔法使いの参加者が多かったことから、メンツを保つための動員が何人もかけられたのではないかとささやかれていた。

そして闘技会初日、グループ戦第一回戦四試合目。その日のグループ戦の最

終試合。出場チームはイグリン防衛隊その一と冒険者ギルド「栄光の輝き」。
その二組が入場してくる。
栄光の輝きは人間種三人とエルフ二人、そして獣人一人の六人組でいかにも中堅の冒険者といったいでたちをしている。
もう一方のイグリン防衛隊はフード付きのマントをかぶった人狼と女剣士、それに小鬼の三人組だ。小鬼は小さな金棒を持ち、女剣士は槍を携えている。人狼は手ぶらで、武器は持っていないように見える。
人狼は大柄な人間種の男性ほど体格だが、剣士と小鬼は小さい。剣士などはまだ少女と言っていいほどだ。観客たちはその容姿をちゃかし、対戦相手の冒険者もうすら笑いを浮かべている。
人狼が防衛隊のリーダーなのだろう。浴びせられるヤジを無視し、観客に向かって吠えるような声で話しはじめた。
「ワンが名はミヅキャン」
フードをかぶった人狼の口から発せられる声はこもっている上にワンワンと響いて聞こえにくい。観客席からは「聞こえねーぞ」のヤジも飛び始めた。
「ワンっぱ、このすきゃただと、キャンこえにくいキャ」
人狼はそう言いながらフードを跳ね上げる。中から出てきたのは左目に黒の眼帯をした狼の顔だ。
「ちっこいの二人に、片目の狼かよ」
対峙していた冒険者の一人が莫迦にしたようにつぶやくのが聞こえたのか、人狼がニヤリと笑った。
「ヒューマナイズ」
人間化の変化魔法を唱える。すると人狼は大柄な女へ姿を変えた。
「これでちょっとは聞き取りやすくなったでしょ」
美月はニヤリ冒険者たちに向かって笑い、観客に向かって声を張り上げた。
「我がニャは美月。拳の技をイェマっ、イェ、イェマラジャに習い、魔法の教えをブリュンヒルデから受ける者。女神に愛でられし者。所属は闇面なれど、自由都市イグリンの依頼を受け、イグリンの自由と平和を願う者。わりぇにてっきなし。我ら闇面にてきなあし。我に戦いを挑む者には死を与えるう」
高い声を震わせながら、つっかえつっかえ口上を述べる美月に一部の観客は失笑を漏らしている。だが、その一方で一部の観客は顔を青くしていた。
「ノービスもいいところだな。口上ぐらいはしゃべれるようにしとけ」
「お前らに賭けないでよかったぜ。ありがとな、儲けさせてくれて」
そんなヤジの中、美月と赤田亜莉朱、そしてイェマラジャの小鬼の筈は余裕の表情で相手を見ていた。
「で、ではじめる。り、両者位置へ」
レフリーも人狼が昨年のグループ戦優勝者であることが判ったのだろう。それと、グループ戦決勝戦ののち行われた行為を思い出したようだ。震える声で両者を開始円へ導いた。
「ま、待ってくれ。棄権する。不戦敗だ。お願いだ、鐘を鳴らさないでくれ。不戦敗にさせてくれ」

対戦相手のその言葉に一部の観客は不満を漏らし、残りの観客とレフリーと主催者席はほっと胸をなでおろした。

「勝者、イグリン防衛隊その一」

すかさず告げるレフリーの勝者名を美月は満足そうに聞いていた。

「我が名は美月。今回はイグリンのために戦う者。我に敵なし、我ら闇面に敵なし。我にあだなす者、我ら闇面を害する者には死を与える。聞け、そして覚えよ。子々孫々に伝えよ。我に挑む者、我らに挑む者には死を与える。我が名は美月。我らは闇面。この名前、ゆめゆめ忘れることなかれ」

美月はゆっくりとコロセウムを見回す。コロセウムはきょとんとしている者と強張っている者に分かれている。

「あ、賭けで儲けようと思ってる人に教えてあげる。明日のイグリン防衛隊その二には私の師匠のイェマラジャとブリュンヒルデがでるからね」

手を振り競技場をあとにしながら美月が告げると、数人の観客が胴元めざして駆け出して行った。その後を追うように「明日の賭け、キャンセルする。キャンセルだ」という悲鳴のような男の声が響いていった。

美月：闇面：隻眼の女

ゲルヒルデ：闇面：女騎士

ストング：個人戦チャンピオン

フレイヤ：ストングの性奴隷

ベリ：レフリー：鳥人

オズ：老子：治癒士

ハルバルズ：オーガ：個人戦決勝戦進出者

赤田亜莉朱：闇面：槍使いの少女

篁：小鬼：イェマラジャの眷属